

# 將軍の世紀

やまうちまさゆき  
山内昌之  
武蔵野大学特任教授・  
東京大学名誉教授

## 「第二十五回」「天下二」の將軍

徳川御三家の争いを制し、八代將軍となった吉宗。  
「継世ノ革命」の裏にあったのは、紀州藩の情報収集能力だった。



(上) 直系ではない徳川吉宗  
(下) 吉宗のブレン・室鳩巢



(早稲田大学図書館蔵)

### 一、尾張はなぜ紀州に負けたのか

天下に一を付ければ字面数で八、まさに八代目の徳川吉宗は「天下二」になる將軍だと初めから噂されていた。將軍職が家康の「御脈」(血筋)に戻り、その死後百一年目に継承するのは、「これみな天命にて人力の預り申し候処にはこれなし」かもしれない。しかし、ひとまずは「下」の字面数七番目の小点に據えられた幼將軍・家継の早すぎた死に触れるべきだろう(正徳六年五月廿四日、享保元年十月廿四日室鳩巢書『兼山秘策』三)。

正徳六年(一七一六)四月三十日未の刻(午後二時頃)、かねてから病床に就いていた家継の容態が変化し、尾張徳川家の江戸城付・水野弥次太夫は老中の登城命令を急いで主人・継友に知らせた。「御駕籠いまだまわらず、やれ馬々と御意、直に御馬にめされて、のりにて出御、御供きれきれにて行」。火急の知らせに駕籠の用意が整わず、焦った継友は乗馬で登城したが、供回りが間にあわず切れ切れで後を追いかけたというのだ。尾張と比べると紀伊藩主・吉宗の反応は迅速このうえもない。吉宗には二十九日夜のうちに老中から「御内証」もあり、三十日の朝になると「彼御館いるめき、何事かざ

はつく」と魚売や油売も不審に思うほどだった。吉宗は午の下一刻(午後一時頃)には、「常々の御供廻りより一倍、御家老兩人、騎馬にて静かに登城」した。尾張継友は吉宗よりも一時間ほど遅れて、江戸市中で「散々の評判」にもなる無様さで登城する。しかも水戸綱条つなぢよりも遅かったのだ。これらの情報は、尾張藩の御置奉行などを務めた朝日文左衛門重章の日記だけに、尾州と紀州を比較する目はシニカルながら公平といつてよいだろう(『鸚鵡籠中記』四、正徳六年四月晦日条)。

ここで將軍継職をめぐる御三家の争いは事実上の決着がついた。申の刻(午後四時頃)になると、尾張と水戸の当主は「しほしほ」と下城し、紀州の吉宗だけが残り、老中らは直ちに二之丸に入るように要請した。継友が帰邸後に送った家継見舞の使者によれば、城中は前代未聞の混乱で近所に大火事が起きたような騒ぎであった。殿中には灯りも少なく、二間に燈心の細い行灯が一つあるくらいなので、人とぶつかりころぶやら誰がどこにいるやら入口がどこやらも分からない無秩序だというのだ。江戸城の喧騒と違い、尾州家は陰鬱な静けさに包まれていた。継友は、付家老の犬山三万五千石・成瀬なるせ正幸、今尾三万石・竹腰たけこし啓岐守正武に加えて側近らと人払いで何事かを話し合った。すると「単人正何やら

大声二つ三つして、不機嫌にして出られし」というから、継友は情報収集や人脈拡大に当たるべき成瀬や竹腰の不手際をなじったのかもしれない。城で起きた重要事態も察知できない江戸城付・水野弥次太夫を、「大ぬかり油断と叱るものもあり」とは、継友その人の罵声が聞こえてくるようだ。正徳六年と享保二年の『文明武鑑』を覗くと、確かに「御城付」として水野弥次太夫の名を確認できるが、歴史が大きく動く瞬間に何をしていたのだろうか。尾張家の間の悪さは否定できない。付家老の竹腰は、將軍重篤の情報もつかめずに、二十八日に名古屋へ帰国する暇を幕府からもらっていたからだ(五月三日出發予定)。

付家老二人の無様さをからかう落首が江戸の町ではやった。「竹の腰ぬけといわれて山城はかほにが家老なんと成瀬も」。山城は竹腰家が代々名乗る受領名である。「成瀬なく竹の腰ぬけ巻岐もなし赤みそつけて単人でんがく」というのもある。二人を罵倒する極めつけは、「尾張にはのふなし猿が集りて見ざる聞ざる天下とらざる(しらざる)」の落首であろう(『鸚鵡籠中記』四、同条)。吉宗が二之丸に入った時、その夜に若年寄一名も泊った。本丸には老中一人、大目付一人が泊番となったが、すでに江戸城は吉宗を迎える時間を刻んでいた

# 文藝春秋

「英語教育」が国を滅ぼす 藤原正

塩野七生「日本人と健康」/特集 東京1964から東京2020へ 新年特別号

